

パラリンピック、国際障害者年など、障害者を取り巻く国際協力、交流はさまざまな面から取り組まれ、年々盛んになってきている。一方、リハビリテーションの各専門領域における国際化も活発となり、アジア、欧米諸国を中心にその交流を深めつつある。今回の特集では各領域の第一人者から、その分野の国際動向を紹介していただくと共に、今後の展望について述べていただいた。

■**リハビリテーション専門医** 日本リハビリテーション医学会の国際委員会で活躍している筆者らが、専門医レベルでの国際動向について分かりやすく解説している。まず、各国の専門医の現状について言及したのち、ISPRM を中心とした国際学会の動向を紹介している。さらにアジアにおけるリハビリテーションの問題点、学会の国際交流の具体的活動など、豊富な内容が盛り込まれている。(岡島康友氏ら、495 頁)

■**リハビリテーション専門看護** 日本におけるリハビリテーション看護の現状が述べられた後、課題としてリハビリテーション看護の位置付けの不明確さが挙げられ、リハビリテーション看護の概念化、看護教育の充実の重要性が指摘されている。このような現状認識を基に、米国、オーストラリアのリハビリテーション看護実践者との交流、英国の現況が紹介され、今後の方向性が示されている。(野々村典子氏、501 頁)

■**理学療法** 国際的組織としての世界理学療法連盟の歴史、現状が紹介された後、その学術大会開催の状況が報告されている。最近では地域ごとの活動に取り組むため、アジア理学療法連盟の役割も重要となってきた。学術活動の面では、日本と米国を中心にその現状が紹介されている。教育の面では、理学療法士の養成におけるわが国の国際社会における役割の重要性が指摘されている。(内山 靖氏ら、507 頁)

■**作業療法** 世界作業療法士連盟とのかかわりの中での国際的な動き、特に教育の最低基準改定に関して積極的取り組みが行われていることがまず紹介されている。さらに、国際作業療法学会の開催状況、わが国における作業療法の国際シンポジウムの歩みが報告されている。日本作業療法士協会による国際交流の現状、アジア-太平洋地域での国際学会の歩みについても言及されている。(佐藤 剛氏、512 頁)

■**言語聴覚リハビリテーション** まず言語聴覚士の人数に関しての欧米との国際比較がなされた後、3つの国際学会の現状が報告されている。次に米国におけるヘルスケア領域の変化に伴う言語聴覚リハビリテーション領域への影響が述べられている。これらに対する米国での言語聴覚領域からの積極的取り組みと共に、海外における失語症に対する新しい取り組みのいくつかが紹介されている。(勝木 準氏ら、516 頁)

■**義肢装具** 義肢装具の領域における国際化を考えるうえで、義肢の進歩がまず紹介されている。ソケットのデザインの変化、ソケットインターフェイスの進歩、膝継手・足部を中心とした部品の開発などの問題に加え、義肢の国際的な最新情報についても言及されている。さらに開発途上国における、赤十字国際委員会を中心とした義肢装具支給サービスへの取り組みの現状も報告されている。(田澤英二氏、521 頁)